

翻訳イクバル著『自我の秘密』その(3)

片岡 弘次 (大東文化大学名誉教授)

Translation of Iqbāl's *Asrār-e Khodī*, No.3

Hiroji KATAOKA

要旨

その(1)と同じ。但しその(3)では訳書『自我の秘密』の第14章より第18章までであり、第18章が最終章となり完訳となる。

目次

- 第Ⅻ章 ガンジス川とヒマラヤの対話に関して、シャイフドバラモンの物語、即ち社会生活の連続は、地域共同体の特徴的な伝統への強い愛着による。
- 第Ⅻ章 ムスリムの人生の目的はアッラーへの信仰告白を高めることと聖戦である。だがもしその聖戦が諸国家を征服する征服欲を満たす聖戦は禁忌となる。
- 第Ⅻ章 「遊牧民の父」として知られるミール・ナジャード・ナクシュバンドによりインド・ムスリムのために書かれた教訓。
- 第Ⅻ章 時は剣である。
- 第Ⅻ章 祈願。

第XIV章

ガンジス川とヒマラヤの対話に関して、シャイフとバラモンの物語、即ち社会生活の連続は、地域共同体の特徴的な伝統への強い愛着による。

I

1. ⁽¹⁾ バナーラスでみんなから尊敬を受けている ⁽²⁾ バラモンが
⁽³⁾ 存在と非存在の海に沈みこんでしまった。
2. 彼は哲学に広い知識を持っていた
彼は神の真理を探究する者を大層尊敬していた。
3. その頭脳は意味を適確に捕え、新しいユニークなことを引き出した
その知能はスバル星と同じ高さであった。
4. その巢は ⁽⁴⁾ 鳳凰の巢のように高かった
月や太陽はその思考の炎で ⁽⁵⁾ 芸香の黒いたねのようであった。
5. 長い間その ⁽⁶⁾ 水差しは血の中に浸っていた
⁽⁷⁾ 知恵の酌人はその酒杯に酒を注がなかった。
6. 彼は知識や学問の園に網を広げた
だが彼の学問の目は ⁽⁸⁾ 意味の鳥を見なかった。
7. その思考の爪は血に染まっていた
存在と不在の結び目は解けなかった。
8. 彼の唇の溜息は彼の絶望の証しだった
その心の絶望は彼の顔に表われていた。
9. ある日彼は素晴らしいシャイフの所へ行った
そのシャイフは胸に人々を正しく指導できる心を持つ方だった。
10. そのバラモンは ⁽⁹⁾ 賢人の言葉に耳を傾けた
自分の唇には沈黙の印を押した。
11. シャイフはバラモンに言った。「高い天を回る者よ
少しは ⁽¹⁰⁾ 地面とも忠誠の約束をせよ。
12. ⁽¹¹⁾ おまえが砂場や荒野をさ迷っていた時
おまえの恐れのない思考が空よりも高くなって過ぎていた。
13. 天を飛んでいる者よ、⁽¹²⁾ 大地と一致せよ
星々の真珠の探索で歩き回るな。
14. わたしは言わない、おまえが ⁽¹³⁾ 偶像を嫌がるようになれとは
兎に角おまえは異端であろうと自分自身の ⁽¹⁴⁾ 聖紐に相応しくあれ。
15. 古い文化の擁護者よ

⁽¹⁾ ワーラーナシーのこと。インド北部、ウッタル・プラデーシュ州東部にあるガンガー（ガンジス）川沿いにあるヒンドゥー教と仏教の一大聖地。

⁽²⁾ インドのヴァルナ（種姓）制度で最高位の司祭階級。

⁽³⁾ 存在と消滅の哲学的難問を解くために。

⁽⁴⁾ 古代中国の想像上の鳥。立派な天子が世に出る時、めでたいしるしとして現れる。

⁽⁵⁾ 彼の思考の光に較べれば、月や太陽の輝きもなきに同じで芸香のたねのように暗かった。

⁽⁶⁾ その心は血に染まっていた。

⁽⁷⁾ 存在と不在の問題を沈黙考したにもかかわらずその解決がなかった。

⁽⁸⁾ 対句5と同じことである。

⁽⁹⁾ シャイフの言葉。

⁽¹⁰⁾ おまえは高い思想の持主だ。だが少し人生の根本的なことも考えよ。

⁽¹¹⁾ 現実の上辺だけの生活とは離れて存在や不在の真の意味を求めてさ迷っていた時。

⁽¹²⁾ 現実の人生の方に関心を示せ。

⁽¹³⁾ ここでのおまえはバラモンでヒンドゥー教徒である。ヒンドゥー教徒は偶像崇拝者。

⁽¹⁴⁾ ヒンドゥー教徒が首や脇下に巻く紐。そしておまえがそれを身に付けるのは正しい。おまえの信仰は正しい。それ故その中で完成を目指せ。ガーリブの詩につきのような対句がある。献身的な帰依こそすべての信仰の基礎／寺院で亡くなったらカアバに葬ってやれバラモンを（『ガーリブ詩集』ガザル 121 より）

- (15) おまえは祖先の人達の主義主張を足蹴りにするな。
16. もし団結で共同体の生があるなら
(16) 不信仰も団結の資本である。
17. おまえは不信仰においても⁽¹⁷⁾完全でない
それ故おまえは心の⁽¹⁸⁾聖域を回る価値がない。
18. ⁽¹⁹⁾われら両人は承認の道から⁽²⁰⁾離れてしまっている
おまえは⁽²¹⁾アーザルから、わたしは⁽²²⁾イブラーヒームから。
19. われわれの⁽²³⁾カイスは⁽²⁴⁾駕籠に乗る人を恋する者でなかった
われわれは恋する人を狂気を持って恋することはなかった。
20. ⁽²⁵⁾自我の灯明が消えた時
⁽²⁶⁾高邁な思想が何の役をするか。

II

1. ガンジス川の水がヒマラヤの麓に当たった
ある日ヒマラヤにガンジス川が言った。
2. 「天地創造の日より肩に雪をかぶせている者よ
おまえの体は幾つもの川のせいで、何か聖紐のようなものを身に付けているようだ。
23. 神はおまえを天の友とした
しかしおまえの足に誇りとなる歩く力は与えなかった。
24. 神はおまえの足より歩く力をなくさせた
こんな状態ではその威厳、高さ、壮観さが⁽²⁷⁾台無しだ。
25. 生とは絶えざる優華な歩みにある
⁽²⁸⁾波の存在を示すものは動きである」
26. ヒマラヤ山はその嘲笑をガンジス川から聞くと
火の海のように憤慨して燃え上った。
27. 山は言った。「川よおまえの広がりわが鏡だ
おまえのような百もの川がわが胸の中にある。
28. この媚態は消滅の準備をするものだ
自分の⁽²⁹⁾特性から離れる者は消滅に値する。
29. おまえは自分の立場が分からない
おまえは自分の損を誇っているが⁽³⁰⁾それはおまえの愚かさによる。
30. 回る天の腹から生まれたおまえよ
⁽³¹⁾おまえのような住人は海岸にいるのがよい。
31. おまえは自分の存在を海に与えてしまった
換言すればおまえは強盗の前に命の現金を差し出してしまった。

(15) おまえの宗教は正しい。まずそれと自分との関係を強固にせよ。

(16) 不信仰が共同体の一致した考えとなり、力強さを持って進むならそれも一つの共同体が永続して行くものである。

(17) 自分の宗教に、たとえそれが異端であったとしても完璧でない者。

(18) カアバ聖殿を黒石の地点から左方向へ7回まわる儀式。この儀式はイスラーム教徒だけが出来る。

(19) シャイフの所に来たバラモン、バラモンに私見を述べているシャイフ。

(20) 両者共にそれぞれの宗教から幾分離れており、共同体の分裂と消滅の要因を持っている。

(21) 偶像崇拜者。

(22) 一神教崇拜者。

(23) アラブ高原にて美女ライラーを恋したマジュヌーン（狂人）の本名。

(24) カイスに恋された美女ライラー。

(25) 高く強固な自我がある時は灯明は消えずに存在する。

(26) 強固の自我がなければ高邁な思想も簡単に風で吹き飛ばされてします。

(27) 生の本来は動きと行動にあるので。

(28) 波は動いていれば波で、動いていなければなんの存在価値もない。

(29) 自我のこと。自分の自我を失なうとその存在は無きに等しい。川は最後は海に入る。それ故自分の自我が消えてしまう。

(30) おまえが自我の人なら自分の存在を確立し、海の中に沈まない。

(31) 自分の存在を他の何かの中に消滅させて保護させてもらうには海岸にいるのがよい。すぐに海に流れ込めるので。

32. 花園の花のように自尊心を保て
 芳香の流布に⁽³²⁾花摘む人の後を行くな。
33. ⁽³³⁾生とは自分の場で成長することである
 即ち自分の花園から花を摘むことである。
34. 何世紀もが過ぎた、⁽³⁴⁾だがわたしは自分の場に立つ
⁽³⁵⁾おまえは考える、わたしは目的地から遠いと。
35. ⁽³⁶⁾わが存在は拡大し、天まで届いた
⁽³⁷⁾わが足元でスバル星も休んだ。
36. ⁽³⁸⁾おまえの存在は海の中で形跡を失ない
 わが頂上は星々の跪拝の場となっている。
37. わが目は⁽³⁹⁾天の秘密を見て取れる
 わが耳は天使の飛翔をも聞き分けてしまう。
38. わたしは努力の情熱で絶えず燃えている
 わたしは⁽⁴⁰⁾ルビー、ダイヤ、真珠を集めている。
39. わたしの中には石がある。そして石の中には火がある
⁽⁴¹⁾水はわが火の上を通れない。
40. おまえは滴か、⁽⁴²⁾自分自身を自分の足の上に落すな
 台風を起す努力をして海と争え。
41. ⁽⁴³⁾真珠の光沢を求める者になれ、そして真珠の小片になれ
 美女の耳の耳飾りとなれ。
42. 自らを増加させよ、そして速度を速めよ
 雷を落とせ、そして洪水をおこせ。
43. ⁽⁴⁴⁾おまえに海も台風を求めるように
 海の狭さに不平を言うように。
44. 海はおまえと較べ自分自身を単なる波と考えて
⁽⁴⁵⁾海はおまえの足下に自分自身を置く。

⁽³²⁾ 芳香のある花を庭師は摘む。芳香がなければ庭師はそれを切らない。花は自尊心があるように見える。同じように自尊心を持つ民族は力があるように見え、他の民族からの攻撃を受けない。

⁽³³⁾ 自我を完全に知ることは、それにより人間が自分の隠れた力及び可能性に気付いて永遠の準備を始めるという本質的な生である。

⁽³⁴⁾ このように立つことが自我の確立となる。

⁽³⁵⁾ ガンジス川は考える。

⁽³⁶⁾ ヒマラヤの自我。

⁽³⁷⁾ 自我を擁護すると栄光と威厳を得る。

⁽³⁸⁾ 弱い自我のものは消滅の餌食になる。

⁽³⁹⁾ 山の高さのせいだ。

⁽⁴⁰⁾ 山にはいろいろの鉱物がある。それらが太陽の熱を受けて、さまざまな宝石になる。即ち人間は自我や情熱によりさまざまな物を得る。

⁽⁴¹⁾ 石を石でこすると石から火花が出る。ヒマラヤは石であるのでこうに言う。火の上に水を撒くと火はすぐ消える。あたかもその火の自我は水と較べて弱いように見える。山の石の自我は非常に強く水はその中にある火を消すことは出来ない。

⁽⁴²⁾ 自分を卑しくするな。

⁽⁴³⁾ 真珠の輝きが水に騙される。しかしその水を誰も飲めない。威厳と参加のために頑丈さと自我の強さが必要である。

⁽⁴⁴⁾ おまえは自分の隠れた力や能力を、偽りの力や敵がおまえを破壊できないように用いよ。

⁽⁴⁵⁾ どこかの民族が自らの可能性を知り、絶えず努力をし始めると、大きな力もその前に跪くことになる。

第XV章

ムスリムの人生の目的は⁽¹⁾アッラーへの⁽²⁾信仰告白を高めることと⁽³⁾聖戦である。だがもしその聖戦が諸国家を征服する征服欲を満たす聖戦は禁忌となる。

I

1. 心を⁽⁴⁾アッラーの色で染めよ
愛に名誉と名声を与えよ。
2. ムスリムの性質は愛により畏敬や影響力を得る
従ってムスリムが⁽⁵⁾アッラーの恋する者でないと、それは邪教徒である。
3. ムスリムの⁽⁶⁾見ること、見ないことの実行は神の喜びのためである。
ムスリムの食べること、飲むことそして眠ることの実行も神の喜びのためである。
4. ⁽⁷⁾その喜びの中で神の満足は消滅する
⁽⁸⁾「しかし普通の人々はどうして信じるか」
5. それは「アッラーの外に」の平原にテントを張った
世界でそれは人々のために至高神の証人となった。
6. その状態での証人は敬虔なるお方である
そしてその方は証人たちの中で⁽⁹⁾一番敬虔なお方である。
7. ⁽¹⁰⁾議論を止めよ、そして愛の熱気の門をたたけ
⁽¹¹⁾行動の暗黒に神の光を降らせよ。
8. 王の衣服を身に纏い、托鉢僧のように生きよ
⁽¹²⁾目覚めた目をもって、神を知る者となって生きよ。
9. ⁽¹³⁾神に近づくことをおまえの行為の目的にせよ
おまえによりその威厳が表わされるように。
10. 目的が⁽¹⁴⁾アッラー以外の他のこととなると、和平も悪となる
もし目的が神となるなら、⁽¹⁵⁾戦争は善である。
11. もしわれらの剣で⁽¹⁶⁾神の名が高められないと
その種の戦いはわが共同体にとり、気高いものでないだろう。
12. ⁽¹⁷⁾ハズラト・シャイフ・ミヤーン・ミールは⁽¹⁸⁾スーフィー聖者である
その命の光ですべての⁽¹⁹⁾精神力の秘密が明かされた。

⁽¹⁾ 唯一・絶対の神の意。世界と人間の創造も。

⁽²⁾ 二つの部分から成る。第一は「ラー・イラーハ・イッラッラー」(アッラー以外に神はなし)と第二は「ムハンマド・ラスールッラー」(ムハンマドはアッラーの使徒である)の二つである。

⁽³⁾ 神のために自己を犠牲にして戦うこと。クルアーン第9章20節によれば「己の財産と生命なげうって奮闘した者は、神の目からは最高の地位にある」となっている。

⁽⁴⁾ ムスリムの人生の目的はアッラーに焦点を当てること。クルアーン第2章138節参照。

⁽⁵⁾ 愛と人間愛に欠けると。

⁽⁶⁾ ムスリムのこれらの行為はクルアーン第6章162節に述べられている。

⁽⁷⁾ 神の喜びと神の満足は一つの姿を取る。

⁽⁸⁾ この行はルーミーの詩からの引用。

⁽⁹⁾ 預言者ムハンマドのこと。ムスリムにとり預言者ムハンマドの神としての属性は完全な模範となり基準となる。クルアーン第2章143節参照。

⁽¹⁰⁾ 哲学的な議論に陥る代わりに、行動の道を取れ。

⁽¹¹⁾ クルアーン第11章114節によれば、善行は悪行を消滅させる。

⁽¹²⁾ アッラーのしるしに対して。

⁽¹³⁾ 神に近付くことが神の属性が身に付くので。

⁽¹⁴⁾ 現世的な目的が生じると。

⁽¹⁵⁾ その人間性が敵の力と対抗するので。

⁽¹⁶⁾ 唯一神であるアッラーの名を高めることがムスリムの義務である。

⁽¹⁷⁾ 現在のパキスタンのラーホールで生まれたイスラーム教聖者(1550~1635年)。ムガル帝国第4代皇帝ジャハーン・ギールに(在位1605~27年)も彼に教えを受けている。

⁽¹⁸⁾ 神秘主義の聖人。

⁽¹⁹⁾ 霊的認識の力。

13. 彼は預言者ムハンマドのイスラームに忠実に従った
彼は⁽²⁰⁾愛の音楽にとつてのフルートであった。
14. その墓は⁽²¹⁾わが町の人々の信仰を強めるものである
それはわれわれにとり、神への尊きの明かりである。
15. 天もその戸口に跪いた
インドの⁽²²⁾王も彼の弟子であった。
16. 王は心の中に食欲の種を蒔いた
他の国々を征服する気持を持った。
17. その食欲さで心に火が燃え上った
剣に⁽²³⁾「なお多くの(入る)者がおりますか」の言葉を教えた。
18. ⁽²⁴⁾デカンに大混乱が起った
王の軍は戦場にあった。
19. ある日、王はその偉大な⁽²⁵⁾聖者の下に行った
聖者から⁽²⁶⁾恵みが得られるように。
20. ⁽²⁷⁾ムスリムは世から神の方に逃げる
彼は自分の方策を祈りで強化する。
21. シャイフは王の言葉を聞き沈黙した
托鉢僧たちの一座はその話⁽²⁸⁾に聞き耳を立てた。
22. 銀貨を手をしている弟子の一人が前に進み出た
そして沈黙を破った。
23. 弟子は言った。「この僅かばかりのものをお受け取り下さい
神を求めて放浪している人を助けるお方様。
24. わが体は努力の汗の中で濡れました
そしてこの一つの銀貨がわが巾着に入りました」
25. シャイフは言った。「この銀貨はわが王のものである
王の衣服を着ていながら乞食である王の。
26. われらの王は太陽や月、星々の支配者でありながら
われらの王は⁽²⁹⁾一番の貧乏者である。
27. 彼は他の者の食布に眼を遣ったのだ
⁽³⁰⁾彼の飢えの火は世に火を付けたのだ。
28. 凶作や病気はその剣に従うものだ
世の中はその征服の結果、荒廃した」
29. 人間は貧困で嘆いている
その⁽³¹⁾食欲さは罪のない人をも殺させている。
30. その権力は世の人間にとり敵である
人間が隊商なら、それは強盗である。
31. それは自らの考えで未熟な考えと騙して
略奪を征服と呼んでいる。

⁽²⁰⁾ 神の尊重と人間的友情の音楽。

⁽²¹⁾ ラーホールの人々にとつて。

⁽²²⁾ ムガル帝国第4代皇帝シャージャハーン(在位1605~27年)。

⁽²³⁾ ケルアーン第50章30節からの引用。この言葉の前に〈その日われが地獄に、「満員になったか」と問うとの言葉がある。なおそれはここでは「さらに多くを」の意味となる。

⁽²⁴⁾ インドの半島部の主要部分を占める高原。アリア人の支配地の南方の土地。

⁽²⁵⁾ スーフィー聖者ハズラト・シャイフ・ミヤーン・ミールの下に。

⁽²⁶⁾ 戦いで勝利に関する恵み。

⁽²⁷⁾ ムスリムがもし聖者に恵みを求めると、世の利害は目的でなく、ただ神への接近がその目的となる。

⁽²⁸⁾ 王がどのような回答を得るか。

⁽²⁹⁾ 広い王国の所有者でありながら。

⁽³⁰⁾ 他の国々を占拠するために一方的に軍を送り殺害を始めている。

⁽³¹⁾ 支配者の国や富を獲得しようとする食欲さ。

32. 王の軍隊も敵の軍も両方とも
その飢えの剣でまっ二つにされる。⁽³²⁾
33. 乞食の飢えは⁽³³⁾ 乞食の命の火である
王の飢えは国や共同体の消滅である。
34. アッラーから離れて⁽³⁴⁾ 剣を抜くと
その剣は⁽³⁵⁾ 自らの胸の中に収まる。

第Ⅸ章

「遊牧民の父」として知られるミール・ナジャード・ナクシュバンドによりインド・ムスリムのために書かれた教訓。

I

1. 花のように土から育ったおまえよ
おまえも⁽¹⁾ 自我の腹から生まれた。
2. 自我を手放すな、その最後が永遠となれ
⁽²⁾ 一つの滴となれ、そして⁽³⁾ 海を飲み込む者となれ。
3. 自我の光で輝やくおまえよ
もしおまえが自我の力を強くするなら、おまえは永遠になれる。
4. その商売の財布には利益がある
その品物を大事にすることで富が得られる。
5. おまえは生きている、⁽⁴⁾ だが亡くなることを恐れている
わたしはおまえにわが身を捧げる、おまえは誤解をしている。
6. わたしは人生の楽器について知っている
それでおまえに人生の秘密は何かを語る。
7. まず⁽⁵⁾ 真珠のように自分の自我の中へ飛び込め
それから自分の独居の場から頭を外に出せ。
8. ⁽⁶⁾ 灰の下に火花を集めよ
炎の姿を取らせ見ている人の目を燃やせ。
9. ⁽⁷⁾ 40年間の修行の家を燃やす者となれ
⁽⁸⁾ 自分の回りを回る者となり、悶える炎となれ。
10. 人生に値する生き方は、⁽⁹⁾ 他の者の回りを回ることを止めることである
自分の存在の中に⁽¹⁰⁾ カアバ聖殿を知らせることである。
11. 羽撃け、そして土地への魅力に引きずられるな
鳥のように高く飛び、⁽¹¹⁾ 落ちる考えを心から出してしまえ。

⁽³²⁾ その食欲の剣で。

⁽³³⁾ 乞食の空腹は命にかかわる。

⁽³⁴⁾ 現世的利益のために。

⁽³⁵⁾ 自分を殺害する原因となる。

⁽¹⁾ 完全な自我、神の自我。

⁽²⁾ 一人の人間。

⁽³⁾ 自我の力で偉大なことを成し遂げ、自らの永遠を準備せよ。

⁽⁴⁾ おまえの本当の人生はおまえの行動による。肉体的な人生は終る。だが偉大な業績はおまえを生き続けさせる。それ故死を恐れるな。

⁽⁵⁾ 真珠は最初、貝の中で水の一滴である。それがやがて真珠になる。これはあたかも自己の中に潜水するようなことである。

⁽⁶⁾ 自分の中に少しの力をうみ、完全な力になったらそれで間違いや暴力の種を燃やすこと。

⁽⁷⁾ 長い間の隷属状態から脱せよ。

⁽⁸⁾ 自我を知り、その困難から脱せよ。

⁽⁹⁾ 自我を強化して他の者、そして他の民族の隷属から抜け出よ。

⁽¹⁰⁾ マッカの聖モスクのほぼ中心にあるイスラームの聖殿のムスリムはカアバの方向に礼拝をする。

⁽¹¹⁾ 体の消える考えに捕われず、前進せよ。死はおまえを駄目にはしない。強い自我で永遠の生をつかめ。

12. 賢明な方よ、もしもおまえが⁽¹²⁾鳥でないなら
⁽¹³⁾洞窟の上に自分の巣を作るな。
13. 知識の獲得に忙しい者よ
おまえに⁽¹⁴⁾ルーミーのメッセージを伝えたい。
14. ⁽¹⁵⁾「もしおまえが知識を利己主義のために利用するとそれは⁽¹⁶⁾蛇となる
知識を心のために利用するとそれは⁽¹⁷⁾真の友となる」
15. おまえは⁽¹⁸⁾小アジアの師について知っているか
彼は⁽¹⁹⁾アレポの町でさまざまな哲学を教えていた。
16. ⁽²⁰⁾彼の足は知の論拠の足枷に縛られていた
彼の船は知の暗黒の台風に襲われていた。
17. 彼は愛の⁽²¹⁾シナイ山を知らなかった⁽²²⁾ムーサーであった
彼は愛や愛の狂気について知らなかった。
18. 彼は⁽²³⁾懐疑論や証明のような学問を教えていた
そして⁽²⁴⁾哲学に関してさまざまな糸を通していた。
19. 彼はギリシャ哲学の難しさを解くと
彼の思考の光はすべて隠れてあった意味を明らかにした。
20. 彼の周囲そして前には本の山があった
彼の唇の上には⁽²⁵⁾本の秘密の説明があった。
21. ⁽²⁶⁾シャムセ・タブリーズーは師の⁽²⁷⁾カマルの指導で
ジャラールウッディーン・ルーミーの方に向った。
22. タブリーズーはルーミーに言った。「これらの騒ぎ、話、大騒ぎは何ですか
この⁽²⁸⁾推定、妄想、論拠は何ですか」
23. ルーミーは言った。「愚か者よ、口を閉じよ
知恵ある者をからかうな。
24. おまえはわが塾から出ていけ
これらは議論のやり取りだ、おまえと何の関係があるか。
25. わが論議はおまえの理解を越えている
この論争は知覚の鏡を輝やかす」
26. ルーミーのこの言葉で、シャムスの怒りの熱は増した
⁽²⁹⁾タブリーズの命から火花が飛んだ。
27. 地面の上にシャムスの目の雷が落ちた
地面の土は彼の息の熱で光となった。

⁽¹²⁾ 強い自我を持たないなら。

⁽¹³⁾ おまえの中に勇気がないなら、自分を敢えて崩壊の中へ押しやるな。

⁽¹⁴⁾ イランのペルシア文学最大の神秘主義詩人(1207~73年)。代表作に『精神的マスマヴィー(神秘主義叙事詩集)』がある。

⁽¹⁵⁾ 以下の句はルーミーの詩の対句より。

⁽¹⁶⁾ それはおまえを殺すことになる。

⁽¹⁷⁾ おまえの人生の中でさまざまな助けとなる。

⁽¹⁸⁾ ルーミーのこと。

⁽¹⁹⁾ シリア北部の中心都市で世界最古の都市の一つ。

⁽²⁰⁾ 初期において彼は哲学や知的学問を教えており精神や魂についてのことは遠かった。

⁽²¹⁾ シナイ半島南部のモーセ山。この山でムーサーが十戒を授かったとされている。

⁽²²⁾ クルアーンに登場する諸預言者で使途の一人。旧約聖書のモーセ。

⁽²³⁾ 人間の認識は主観的・相対的なものであるから、確実な知識や客観的・普遍的な真理をとらえることはできないとする主張。

⁽²⁴⁾ 彼の教えの力点は哲学にあった。

⁽²⁵⁾ ルーミーの広い研究と知識によって。

⁽²⁶⁾ 13世紀中頃、トルコ中南部コンヤに現れた神秘家。ルーミーは彼の中に神的顕現を見出す。

⁽²⁷⁾ バーバー・カマルッディーン・ジュンディーのこと。

⁽²⁸⁾ これらのことを通して論議は進んでいるが。

⁽²⁹⁾ シャムスのこと。

28. シヤムスの心の火は⁽³⁰⁾ 感覚の脱穀場を燃やした
その哲学の⁽³¹⁾ 倉庫を燃やした。
29. 愛の奇跡を知らなかったルーミーは
愛の調和の歌を知らなかったルーミーは
30. 言った。「おまえはこの火をいかに点けたか
賢人の倉庫をいかに燃やしたか」
31. シャイクは言った。「⁽³²⁾ 聖紐を身に付けている者よ
この感情は真の愛の歓喜と陶醉だ。おまえと何の関係があるか」
32. われわれの⁽³³⁾ 様子はおまえの理解を越えている
われわれの愛の炎は錬金術だ。
33. ⁽³⁴⁾ あなたは⁽³⁵⁾ 哲学の水で装備した
あなたの思考の水で露が降りる。
34. ⁽³⁶⁾ あなたは自分の塵で火を燃やせ
⁽³⁷⁾ 自分の土埃で炎を作れ。
35. 完全なムスリムの知識は心の情熱である
イスラームの意味とは⁽³⁸⁾ 沈むことから遠ざかることである。
36. 預言者⁽³⁹⁾ イブラーヒームは多神教になることから救われると
⁽⁴⁰⁾ ナムルードの火の中に安心して座っていた。

II

37. ⁽⁴¹⁾ みなさんは⁽⁴²⁾ 真の知識に背を向けてしまった
パン一切れのために宗教という現金を失ってしまった。
38. おまえは⁽⁴³⁾ サルマー探して大騒ぎだ
だがその⁽⁴⁴⁾ 黒い瞳が何だか分からない。
39. ⁽⁴⁵⁾ 生命の水を短剣の刃から求めよ
恐龍の口から天国の川を求めよ。
40. ⁽⁴⁶⁾ 黒い石を偶像寺院の門から求めよ
麝香鹿の袋を狂った犬から求めよ。
41. 愛の情熱を現代の学問から求めるな
神の喜びをその邪教徒の杯に期待をするな。
42. ⁽⁴⁷⁾ わたしは奮闘している
わたしは現代の学問の秘密を知っている。

⁽³⁰⁾ ルーミーの哲学や知識。

⁽³¹⁾ ルーミーの本の山。

⁽³²⁾ ヒンドゥー教徒が肩に掛けている紐。この場合ムスリムが身に付けているとして似非ムスリムの意。

⁽³³⁾ 陶醉や歓喜の様子。そしてそれは人間を寝かせてしまう。

⁽³⁴⁾ ルーミーは。

⁽³⁵⁾ 哲学は愛の象徴である情熱を欠く。

⁽³⁶⁾ ルーミーよ。

⁽³⁷⁾ あなたの中に情熱と歓喜が生じるように真の愛を取れ。

⁽³⁸⁾ アッラーから遠ざからず、常に一神教徒でいること。

⁽³⁹⁾ クルアーンに登場する諸預言者の1人で一神教徒。出身はメソポタミアで、郷里の人々の偶像崇拜を批判し、迫害を受ける。しかしその迫害にもかかわらず一神殿の強い支持者。

⁽⁴⁰⁾ 抑圧的なナムルード王にイブラーヒームは火中に投げられたが火が花に変じたという。クルアーン第21章69節参照。

⁽⁴¹⁾ ここより現代のムスリムに向けて語る。

⁽⁴²⁾ 知識の真の目的は神を認識すること、しかし現代の西洋教育のせいで人々はそれに関心を払わなくなった。

⁽⁴³⁾ アラブの美女で、その名前。ここでは現代の西洋の学芸の意。

⁽⁴⁴⁾ 宗教の知識(神の知識)。至高の神があなたにその富を賜ったが、それが分からない。

⁽⁴⁵⁾ この対句で述べられていることは実際にあり得ない不可能なことである。

⁽⁴⁶⁾ カアバ聖殿の中にある石。対句40で述べられていることは対句39で述べられていることと同じように実際にあり得ないこと。即ち現代の学芸は人間に正しい人間性を見せる代りに人間を窒息させている。

⁽⁴⁷⁾ イクバルは。

43. ⁽⁴⁸⁾ 庭師たちはわたしを試した
そしてわたしをその花園の秘密を知る者にした。
44. わたしはその花園を ⁽⁴⁹⁾ 訓戒のチューリップの花園と見た
それは紙の花園で ⁽⁵⁰⁾ 匂いの蜃気楼であった。
45. わたしはその花園から解放されると
⁽⁵¹⁾ ツーバーの枝にわが巣を作った。
46. ⁽⁵²⁾ 現代の学芸は大きなヴェールである
それは偶像崇拜で偶像売り、さらに偶像彫りである。
47. その現状は ⁽⁵³⁾ 現像の監獄に捕われている
感覚の限界から外に出ることができない。
48. この学問は ⁽⁵⁴⁾ 生の道を行くことができない
それは自らの首に ⁽⁵⁵⁾ 短剣を押し当てている。
49. 火はチューリップのように赤いが冷たい
炎は ⁽⁵⁶⁾ 霜のように冷たい。
50. ⁽⁵⁷⁾ その本性は愛の情熱を欠いている
その本性は探究の世界では機嫌を悪くする。
51. 愛は知能の病気の医師である
そのメスで知能の狂人はよくなる。
52. 全宇宙が跪拝者で、愛は跪拝の対象である
愛は知能の ⁽⁵⁸⁾ ソームナート寺院を征服した ⁽⁵⁹⁾ マハムードである。
53. この ⁽⁶⁰⁾ 古い酒はその水差しにない
「神よ」の嘆きはその夜の運命でない。

Ⅲ

54. ⁽⁶¹⁾ おまえは自分のすらりとした ⁽⁶²⁾ 恋人を知らなかった
⁽⁶³⁾ 他の糸杉をよりすばらしいと考えた。
55. おまえは自らを竹笛のように ⁽⁶⁴⁾ 中を空っぽと考えた
そして今、⁽⁶⁵⁾ 他の歌に心を向けている。
56. 他の食卓よりパンの欠けらを求める者よ
おまえは ⁽⁶⁶⁾ 他の店から自分のものを探している。

⁽⁴⁸⁾ 対句 43 を含めて、対句 41、42 はイクバルのイギリス留学の経験を考慮しての個人的見解である。イクバルはその留学を通して西洋の学問、文化、社会を見ている。この対句の中で庭師の意味は西洋での教師、そして花園の秘密はそれらの学問、文化などの微妙さである。

⁽⁴⁹⁾ 訓戒と忠告に満ちた花園。

⁽⁵⁰⁾ 花園の本来の芳香を欠くものであった。

⁽⁵¹⁾ 天国にある木。即ちそれらの学芸の影響から自由になると自分の本拠地に中心を移した。

⁽⁵²⁾ この学芸は人間の心と魂の訓練の代りに、それらを無感覚にさせるもので物質主義に人々を導くものである。

⁽⁵³⁾ 物質主義の外に出られず、また愛の限りない広がりを得ることができない。

⁽⁵⁴⁾ 神に対する真の愛を知らず、そこまで行き着けない。

⁽⁵⁵⁾ 物質主義の短剣。

⁽⁵⁶⁾ 愛や情熱がない。

⁽⁵⁷⁾ 現代の諸学は確かに知能は生む、しかし愛がない。そして愛のない知能には限界がある。

⁽⁵⁸⁾ 偶像寺院。

⁽⁵⁹⁾ アフガニスタン東部の町ガズナからインド亜大陸北部まで支配したガズナ朝(977~1187年)の最盛期の君主(在位998~1030年)でソームナート寺院を略奪した。

⁽⁶⁰⁾ 愛。愛は人間を神の下で哀願させ、大きな力の恵みを受け、偽りの力も恐れなくなる。

⁽⁶¹⁾ イスラーム共同体よと呼びかけている。

⁽⁶²⁾ イスラームの学芸の価値。

⁽⁶³⁾ 西洋の学芸。

⁽⁶⁴⁾ 自分の文化を無価値なものと考えた。

⁽⁶⁵⁾ 他の外面的なまぶしい文化。

⁽⁶⁶⁾ とはいえ、ヨーロッパの人々はわれわれの学芸をある時期に利用して彼らの無知蒙昧を終わらせたのだ。

57. ムスリムの宴は⁽⁶⁷⁾他の燈明で明るさを得た
その⁽⁶⁸⁾マスジドは他の火花で明るさを得た。
58. ⁽⁶⁹⁾鹿がカアバ聖域から逃げると
⁽⁷⁰⁾獵師の矢はその脇腹を裂いた。
59. ⁽⁷¹⁾花の花弁は匂いのように広がってしまった
自分自身が逃げ出した者よ、自分の所へ戻れ。
60. クルアーンの知恵の管理者よ
⁽⁷²⁾失った唯一性を再び取り戻せ。
61. われらはイスラーム共同体の城塞の門番である
イスラーム共同体の⁽⁷³⁾流儀や礼儀作法を止めて邪教徒になった。
62. ⁽⁷⁴⁾古い酌人の酒杯は壊れてしまった
⁽⁷⁵⁾ヒジャーズの放蕩者の宴が引っ繰り返ってしまった。
63. カアバは⁽⁷⁶⁾かつてのわが偶像で賑わっている
そして邪教徒はわれらイスラームを嘲笑している。
64. ⁽⁷⁷⁾シャイフは偶像への愛でイスラームより手を洗った
そして⁽⁷⁸⁾聖紐でイスラーム教用の数珠の紐にした。
65. ⁽⁷⁹⁾ピールはその白い髭のせいでピールとなり
路地裏の子供たちにとって嘲笑の対象となった。
66. 心は⁽⁸⁰⁾「ラー・イラー」の言葉を欠き
⁽⁸¹⁾欲望の偶像で偶像殿になっている。
67. 髪の高い人が⁽⁸²⁾襤褸を身にまとっている
この⁽⁸³⁾宗教売りは何とも残念。
68. 彼らは弟子たちと日夜旅をしている
⁽⁸⁴⁾共同体にとり必要なことは何も知らない。
69. 彼らの目は⁽⁸⁵⁾水仙の花のように光がない
彼らの胸は⁽⁸⁶⁾心の富がない。
70. 説教師もスーフィー聖者も位階の亡者である

⁽⁶⁷⁾ 他の文化の影響。

⁽⁶⁸⁾ イスラーム寺院。

⁽⁶⁹⁾ ムスリムがイスラームの文化や教育から離れると。

⁽⁷⁰⁾ 他の民族がムスリムを崩壊させた。

⁽⁷¹⁾ イスラーム共同体の者は自分の存在を忘れ、過去の偉大さも忘れてしまった。

⁽⁷²⁾ クルアーンを再び学び、それを行動の指針にして唯一性を守れとの訓戒。クルアーン第3章103節に「あなたがたはアッラーの絆に皆でしっかりと縋り、分裂してはならない」とある。

⁽⁷³⁾ クルアーンの教えを実行せず、分裂と分離の獲物となり自らを墮落させた。

⁽⁷⁴⁾ ムスリムの最初の神の唯一性や結合がなくなった。

⁽⁷⁵⁾ 聖地のマッカやマディーナのある地域。

⁽⁷⁶⁾ 聖地カアバはイスラームが成立する前は偶像のメッカであり、部族ごとの偶像があった。

⁽⁷⁷⁾ スーフィーの師、即ち神秘主義指導者。

⁽⁷⁸⁾ ヒンドゥー教徒が首や脇下に巻く紐。即ちイスラーム教の宗教指導者はムスリムの中に正しいイスラーム精神を教える代りに、そして一致団結を教える代りに、それぞれのグループに分割することを教えた。また他の宗教の儀礼にイスラームの名前を与え、それを増長させてしまっている。

⁽⁷⁹⁾ スーフィー聖者。ピールの仕事は新しい世代の教育と指導であった。だがその真価がなくなってしまった。その結果、若い世代から尊敬を受ける代り、嘲笑の対象となった。

⁽⁸⁰⁾ 神はなしの意。完全な言い方とは「ラー・イラー・イッラッラー」で「アッラー以外に神はない」の意。

⁽⁸¹⁾ われらは絶対の神を唯一至高神と認める代り、貪欲に捕われ、利益獲得のために奔走し利益崇拜者になってしまった。

⁽⁸²⁾ スーフィー聖者の格好をしている。

⁽⁸³⁾ 自称スーフィーの格好をし、人々の無知を利用して贅沢をしているこれらの人々は、正に宗教をうまく自分のために使う人々である。

⁽⁸⁴⁾ 彼らは自分の利益獲得だけに奔走しており、イスラーム共同体のことについては何の関心もない。

⁽⁸⁵⁾ 水仙の花の形は目と同じと考えられている。しかし目のようではあるが実際は見えない。

⁽⁸⁶⁾ 真の愛。

- (87) 白い手の共同体の奇跡も地に落ちた。
71. 説教師たちはその目を偶像殿の方に向けていた
- (88) 教令の権威者が宗教の教令を売っている時に。
72. 友よわれわれにこの後どんな解決法があるかわれらの師が居酒屋の方に顔を向けていては。

第Ⅷ章

時は剣である。

I

1. (1) イマーム・シャーフィイーの聖廟は緑色に輝いている
シャーフィイーの(2)ぶどうの木のせいで世界はほろ酔い加減である。
2. 彼の思考は天から星々を取った
彼は(3)時に鋭い剣の名を与えた。
3. わたしは何と言ったらいいか、この剣の(4)秘密は何か
その剣の刃は人生に満ちている。
4. その剣を持つ者は希望や恐怖とは関係がない
その手は(5)カリームの手よりも輝やいている。
5. 石は(6)その一撃で粉々になった
(7)海は乾いて陸地になった。
6. 預言者ムーサーの手に正しくこの(8)剣があった
彼の事情は(9)方策を越えていた。
7. (10)彼は紅海を引き裂き
海を陸地のように乾かせた。
8. ハイバル城を征服した(11)ハイダルの手
その力も正にこのような剣からであった。
9. (12)回転する大空の回転は見るに値する
日夜の変化は熟考に値する。

(87) 預言者ムーサーによる奇跡でムーサーの言葉に従い手を懐に入れるとその手が白くなる。クルアーン第28章32節参照。

(88) アッラーの方に関心を払い、アッラーから恵みを求める代りに、金持ちや支配者から物品を取り、その代りに彼らの言うことに従いその教令を彼らに都合のよいものにしていく間に。

(89) われわれの宗教指導者が共同体に無関心となってしまった今、誰が指導してくれるのだろうか。

(1) シャーフィイー学派の名祖にして法源学の創始者(767~820年)。マッカ、マディーナ、イラクで学び晩年はエジプトに移住し、当地で没する。

(2) 彼の著作から生じる学問の芳香。なお彼の主著には法源学を扱った『論考』や実定法の大著『母なる書』がある。

(3) 時は誰にとっても止まらないものである。この止まらない本質により絶えず変革を起している。

(4) 時や時間は一つの創造的な動きである。時は道に生じる邪魔を切り裂き、道を作りながら進む。この時を御する者は永遠を得る。

(5) カリームとは話す意であり預言者ムーサーは神と話した。それ故預言者ムーサーのことであり、ムーサーが懐から手を出すと白く輝やきムーサーの奇跡として知られている。クルアーン第28章32節参照。

(6) 預言者ムーサーの一撃の奇跡。即ちアッラーの言葉に従い杖で岩を打つと、12の泉が湧き出て各支部に水を与えることができた。クルアーン第2章60節参照。

(7) 預言者ムーサーたちが敵に追われ逃げている時、目の前に海が現われた。ムーサーはその海を二つに分け、その間に陸地を通り逃げきったというムーサーの奇跡。クルアーン第2章50節参照。

(8) 時や時間を支配する力を持っていた。

(9) 知能とか方策の力ではない。

(10) 預言者ムーサーたちがフィルアウンの軍勢に追われた時、アッラーの「あなたの杖で海を打て」の啓示によると、海が割れ、ムーサーたちが逃げる間、割れた海の間が道となった。クルアーン第26章63~66節参照。

(11) 第4代正統カリフ・アリー(在位656~61年)の呼称、獅子の意。その勇猛さで628年、預言者ムハンマドによるアラビア半島西部の町ハイバルのハイバル遠征には多大の武勲を挙げた。

(12) クルアーン第3章190節によると「天と地の創造、夜と昼の交替の中には、思慮ある者への印がある」とあるようにこのことは熟考が必要である。

10. ⁽¹³⁾ 過去と現在に捕われた囚人よ、熟考せよ
自分の心の中に ⁽¹⁴⁾ もう一つの世界があるのを見よ。
11. あなたは自分の土地の中に暗黒の種を蒔いた
⁽¹⁵⁾ 時を線のように考えている。
12. 再びおまえは日夜の尺度で
おまえの考えは時間の長さを計った。
13. おまえはこの ⁽¹⁶⁾ 紐を肩に掛ける ⁽¹⁷⁾ 聖紐にした
偶像のように誤まりの売り手となった。
14. おまえは練金葉だったが土の固まりになってしまった
かつては神の秘密を産んだが、⁽¹⁸⁾ また誤まりの固まりになってしまった。
15. おまえはムスリムか、⁽¹⁹⁾ その聖紐より自由になれ
自由の共同体の灯火となれ。
16. おまえは ⁽²⁰⁾ 時の本質を知らない
⁽²¹⁾ 永遠の人生を知らない。
17. おまえはいつまで日夜の虜なのだ
おまえは時の秘密を ⁽²²⁾ 預言者ムハンマドの指示で理解する努力をしなければならない。
18. これやそれ、即ち昼間や夜は時の速さで生じる
⁽²³⁾ 人生とは時の秘密の中の一つの秘密である。
19. 時の本質は太陽の回転と関係がない
時は永遠であり、太陽は永遠でない。
20. ⁽²⁴⁾ 時は贅沢であり悲しみでもある、換言すれば追悼でもあり喜びでもある
時は月や太陽の輝きの秘密である。
21. おまえは時を ⁽²⁵⁾ 住居のように広げた
おまえは昨夜と明日を区別した。
22. ⁽²⁶⁾ おまえは自分の花園から芳香のように外に出た
おまえは自分の手で自分の監獄を作った。
23. われわれの時は始まりも終りもなかったが
⁽²⁷⁾ われわれの良心の花壇から花が咲いた。
24. 生きている者は、その本質の神の神秘的認識により生き生きとなる
その存在は朝よりも明るく輝く。
25. 人生は時と関係がある、時は人生と関係がある
「⁽²⁸⁾ 時を悪く言うな」とは預言者ムハンマドの言葉である。

⁽¹³⁾ 時は過去や現在が尺度で計られる線ではない。時はさまざまな時に、さまざまな人によってされる変化と創造である。

⁽¹⁴⁾ 時の真価がわかるのは、それは征服と創造の世界を与えることである。

⁽¹⁵⁾ この考えに基づき征服と創造の偉大な業績を挙げた人はいない。

⁽¹⁶⁾ 時や時間についての一般的な考え。

⁽¹⁷⁾ ヒンドゥー教徒が首や脇下に巻く紐。

⁽¹⁸⁾ かつてムスリムは偉大な業績をあげ、偽りの力を消す力があつたが、今日のムスリムは昔の情熱を失ったことで古い土が積み重なるだけのものになってしまった。

⁽¹⁹⁾ 初期のムスリムのように情熱と行為をもって隷属の鎖を絶ち切れ。そしてそれだけでなく人間性の繁栄のために努力し人々の灯火となれ。

⁽²⁰⁾ 時の根本とは偉大な業績を完成すると得られる永遠の命である。

⁽²¹⁾ 現代のムスリムは偉大な業績をあげるにより自分の永遠を用意することを知らない。

⁽²²⁾ 『預言者の言行録』によればわたし(ムハンマド)はアッラーとの時間をどんな天使や預言者にも煩されず持つことが出来ると。即ち永遠を楽しんでいると。時は限られた時間の経過の感覚でなく、その間にどの位の興味を感じられたかを計るものであると言う。

⁽²³⁾ 人生は時の中で過ぎるものでなく、時が人生の創造力となるものである。

⁽²⁴⁾ 時のすべての関係は生命とである。

⁽²⁵⁾ 人々は時を幾つもの物に分けた。だが時や時間はそのように分割されるものでない。

⁽²⁶⁾ 上記のことに気づいていたら昨夜と明日の虜となることなく永遠の生を得られる業績を産んでいた筈だ。

⁽²⁷⁾ 人間が自我に気付くとその隠れた力を用いて、変革を起す。そして時はその力の中にあり、助けとなる。

⁽²⁸⁾ この語句は『預言者の言行録』の中のものである。時は終りがなく永遠である、それは神であり尊重しなければならない。

Ⅱ

26. わたしはあなたに真珠のように輝やく⁽²⁹⁾一つの話語りたい
あなたが奴隷と自由民の違いが分かるように。
27. ⁽³⁰⁾ 奴隷は日夜の回転の中で、知らぬ間に時を失なっていく
一方⁽³¹⁾ 自由民の心の中では、重要性をもって時が失なわれていく。
28. 奴隷は日夜を通して屍衣を準備している
そして日夜を通してシーツで自分を覆う。
29. だが自由民は自らを土から外に出す
そして時代を自らのシーツの中に巻き込む。
30. ⁽³²⁾ 奴隷は鳥のように朝夕の網の中に捕われている
その命の上に飛翔の喜びはない。
31. それに反して⁽³³⁾ 自由民の胸は息をする所
日々の鳥にとって⁽³⁴⁾ それは鳥籠である。
32. 奴隷の性格とは与えられる物で満足する性格である
その心の上に来る出来事は⁽³⁵⁾ ユニークさや新しさに欠ける。
33. ⁽³⁶⁾ 怠慢でその居場所は前のまま
朝夕の嘆きも前のまま。
34. 自由民の仕事は毎瞬新しい物を作り出すこと
自由民の弦は毎瞬新しい曲をかき鳴らすこと。
35. 自由民の性格は繰り返しを我慢しない
その道は絶えず同じ所に戻ってくる輪でない。
36. 奴隷にとっては日々が⁽³⁷⁾ 鎖である
その唇の上には⁽³⁸⁾ 運命という語が常にある。
37. 自由民の勇気は運命に対して相談役となる
その手で⁽³⁹⁾ 新しい出来事が生まれる。
38. 過去と未来は自由民の現在の中に⁽⁴⁰⁾ 同化されている
過去は急ぐことの中での休養である。
39. このことの理解に⁽⁴¹⁾ 言葉は必要でない
このことは理解を越えている。
40. わたしは時について話した、だがわが浅い語句では⁽⁴²⁾ 意味を恥じる
意味自身はわたしは語句と何の関係があるかとの不平を持つ。
41. 実際に、生きた意味は、言葉で表わされると消えてしまう
⁽⁴³⁾ あなたの息こそがその火を消してしまう。
42. ⁽⁴⁴⁾ 隠れているものも現われているものも⁽⁴⁵⁾ 心の中にある

⁽²⁹⁾ これ以下で奴隷と自由民が時に対してどのように接するかを述べている。

⁽³⁰⁾ 奴隷は時に支配されている。それ故時の価値が分からない。

⁽³¹⁾ 自由人は自ら時を支配しているので奴隷とは違い、時が消えていくのを惜しむ。

⁽³²⁾ その生は無目的で、自分の永遠の目的のための準備をしない。

⁽³³⁾ 新しい物を得る所となる。

⁽³⁴⁾ 行動を制限する所となる。

⁽³⁵⁾ 奴隷には永遠を用意する情熱が欠けているので。

⁽³⁶⁾ 奴隷は行動の味を知らない。困難に打たれた奴隷はそこから抜け出そうとせずにそのままである。

⁽³⁷⁾ 奴隷は自らの努力で時を制する代りに常にその虜となっている。

⁽³⁸⁾ 諦めの言葉。

⁽³⁹⁾ 人間の運命を変えるような出来事。

⁽⁴⁰⁾ 自由民は日夜の変化する時間の虜でなく、時間が自由民に捕えられおり過去も未来もない。

⁽⁴¹⁾ 説明は不可能である。

⁽⁴²⁾ このテーマの説明は不可能である。

⁽⁴³⁾ このテーマの説明がされるとその存在も消えてしまう。

⁽⁴⁴⁾ アッターから離れているものも、アッターの前にあるものも。

⁽⁴⁵⁾ 心と関係を持つ。

⁽⁴⁶⁾ 毎日のことや過ぎ去ったことの秘密も心の中にある。

43. 時の楽器は音なしの歌である
時の秘密を知りたいなら⁽⁴⁷⁾ 弾き手の心の中へ飛び込め。

Ⅲ

44. その当時の思い出よ、⁽⁴⁸⁾ 時代の剣が
わが強力な手と親しかった当時の思い出よ。
45. われわれは心の畑に宗教の種を蒔いた
そして⁽⁴⁹⁾ 真理の顔からベールを取った。
46. われわれの爪は⁽⁵⁰⁾ 世の結び目を解いた
この土の運がわれらの⁽⁵¹⁾ 跪拝で目覚めされた。
47. われわれは真理の壺から⁽⁵²⁾ パラ色の赤い酒を飲んだ
そして古い⁽⁵³⁾ 居酒屋を襲った。
48. ⁽⁵⁴⁾ みなさん、みなさんのガラス瓶に古い酒がある
瓶はあなたの酒の熱で溶けている。
49. あなたがたは高慢や慢心、尊大さで⁽⁵⁵⁾
われわれの知識の貧弱さを嘲笑している。
50. 時にはわれわれの酒杯もかつての宴の飾りだった
時にはわれわれの胸にも生き生きした心があった。
51. ⁽⁵⁶⁾ 顕現で飾られている現代の時代
それはわれわれの⁽⁵⁷⁾ 足の埃から生れた。
52. ⁽⁵⁸⁾ 真理の畑はわれわれの血で洪水となった
世界の真理崇拝はわれわれの尽力に依る。
53. われわれのせいで世の中は「アッラーは偉大なり」の⁽⁵⁹⁾ 叫びを上げる世になった
われわれの地から多くのカアバが出来た。
54. 神はわれわれにクルアーンの意味を教えた
そしてそれら⁽⁶⁰⁾ 自らの食料をわれわれの手で分けさせた。
55. ⁽⁶¹⁾ われわれの手から王冠や指輪がなくなってしまったとて
われわれファキールを軽蔑の目で見ろな。
56. あなたがたの目で見れば、われわれは敗者であり
反動主義者であり卑しい墮落者のように見える。
57. われわれは⁽⁶²⁾ 「神はなし」により名誉を得ている

⁽⁴⁶⁾ 時の秘密。

⁽⁴⁷⁾ 弾き手の心がかかると、隠れている力や能力が分かる。

⁽⁴⁸⁾ ヨーロッパが無知蒙昧に浸っていた時、イスラームの光が広がり、それより生じてきた学芸が世界の目を眩まさせていた時の思い出。

⁽⁴⁹⁾ イスラーム以前は偶像崇拝の時代であったが、イスラームは人々に神の唯一性を知らせ、無知蒙昧の時代から人々を抜け出させた。

⁽⁵⁰⁾ 人間の生活の中で正しい目的は何かということ。それをイスラームが明示した。

⁽⁵¹⁾ 唯一の神に跪拝することで。

⁽⁵²⁾ イスラームの宗教。

⁽⁵³⁾ 偶像崇拝の宗教。

⁽⁵⁴⁾ ヨーロッパ人よ。あなたがたの瓶にムスリムの古い学芸や文化がある。

⁽⁵⁵⁾ イスラーム教徒の持つ文化や学芸。

⁽⁵⁶⁾ 現代の科学的諸学。

⁽⁵⁷⁾ 現代の科学や諸学の結果。

⁽⁵⁸⁾ イスラームは真理の宗教で、その布教のため、そして人間を偽りの力より解放するために、人々は自分の命を犠牲にした。

⁽⁵⁹⁾ 多くのイスラーム教徒が生まれた。

⁽⁶⁰⁾ あらゆる科学や諸学をムスリムにより世に広めさせた。

⁽⁶¹⁾ この対句は西洋人に向けて言っている。即ちムスリムは幾世紀にも渡り、世界をリードしてきたが、残念なこと今はそうでない。

⁽⁶²⁾ 完全な言い方は「アッラーのほかには神はなし」である。この言葉でイスラームにおいて人間性の高さを示している。

- われわれは⁽⁶³⁾両世界を見ている。
58. われわれは⁽⁶⁴⁾現在及び将来の悲しみから解放されている
われわれは預言者ムハンマドとの愛の約束をしているので。
59. われわれは神の心の中に隠された秘密である
⁽⁶⁵⁾われわれは⁽⁶⁶⁾預言者ムーサーと⁽⁶⁷⁾預言者ハールーンの相続人である。
60. ⁽⁶⁸⁾今も太陽も月もわれわれの光で輝やいている
今もわれわれの雲の中に⁽⁶⁹⁾雷がある。
61. われわれの本性は神の鏡である
ムスリムの存在は⁽⁷⁰⁾アッラーのしるしの中の一つである。

第ⅩⅩ章

祈願

I

1. 神よ、あなたは世界の魂のようである
あなたはわれらの魂である だがわれわれから⁽¹⁾隠れている。
2. 歌は⁽²⁾あなたの恵みで人生の楽器の中にある
⁽³⁾死はあなたの道で人生の羨望である。
3. またこの⁽⁴⁾悲しい心の慰めとなってくれ
またわれわれの心の中に⁽⁵⁾住んでくれ。
4. またわれわれから名誉と尊敬を求めよ
未熟な恋する者を⁽⁶⁾熟した恋人にしてほしい。
5. われわれは自分の⁽⁷⁾運命をこぼすだけである
あなたの価値は高く、われわれは極貧だと言って。
6. 貧しい者から⁽⁸⁾美しい顔を隠すな
⁽⁹⁾サルマーンやビラルのような愛を売れ。
7. ⁽¹⁰⁾眠りなき目と心やすまらぬ心をわれらに与えよ
またわれらに水銀のような性質も与えよ。
8. ⁽¹¹⁾輝やかなしいクルアーンの章を見せよ

⁽⁶³⁾ この世と来世の意で、この世では人間の平等を、来世ではこの世の精算を求めている。

⁽⁶⁴⁾ この世そして来世での悲しみ。この世では預言者ムハンマドの愛が得られ、来世では同じくその取りなしで、復活の日が救済の日となる。

⁽⁶⁵⁾ イスラーム教徒は。

⁽⁶⁶⁾ クルアーンに登場する諸預言者・使徒の人。旧約聖書のモーセ。

⁽⁶⁷⁾ クルアーンに登場する預言者の一人。ムーサーの兄。旧約聖書のアロン。

⁽⁶⁸⁾ イスラームにより世界は輝やいている、イスラームにより無知蒙昧の時代と残虐の時代が終って。

⁽⁶⁹⁾ 物質主義より救う力。

⁽⁷⁰⁾ 神は善良な者には慈悲深く、残虐者や破壊者には全力で怒る。クルアーン第48章29節参照。

⁽¹⁾ 見えないので隠れているという。

⁽²⁾ 神の厚情でわれわれは人生の恵みを得ている。

⁽³⁾ 死は神が定める寿命である。イスラームでは一般に死は厭うべきもの、恐るべきものと説いていない。特に殉教者は死んだのではなく、神のもとで生きている(クルアーン第3章169節参照)とされているので羨望の的である。

⁽⁴⁾ イスラーム共同体の衰退と隷従の状態。

⁽⁵⁾ 神よ、初期イスラームの時代のようにわれわれの心が生き生きとなるように。

⁽⁶⁾ 神を全面的に信じる恋人。

⁽⁷⁾ 感動を忘れ、絶えざる努力や実行も忘れ。

⁽⁸⁾ 神よ、その美しい顔を。

⁽⁹⁾ サルマーン(?~655/6年)はペルシア人で預言者ムハンマドの教友の一人。ビラル(?~638・39・41・42年)はエチオピア人で同じく教友の一人。どうかわれら貧しき者にもサルマーンやビラルのような祝福を与えよ。

⁽¹⁰⁾ 真に相手を愛する気持、即ち真の恋人から遠く離れていると常に不安になるような気持。

⁽¹¹⁾ 現在のムスリムの隷従や衰退から抜け出て、更に神に背く勢力を亡ぼし、過去のムスリムが感動したような、今そいうことへの感動を起こさせるような章。クルアーン第26章4節がそれに当る。

敵の頭が垂れるような章を。

9. この干し草を火山にしまえ
われわれの火で⁽¹²⁾ 神以外のものを焼き払ってしまえ。
10. イスラーム共同体が⁽¹³⁾ 団結の綱を手放すと
われわれが成すことの上に無数の⁽¹⁴⁾ 困難が降り掛ってきた。
11. われわれはこの世で星々のように四散している
われわれは互いに仲間である、だが実際は互いに見知らぬ者である。
12. 神よ再びこれらの頁を⁽¹⁵⁾ 糸で綴じて下さい
再び前のような⁽¹⁶⁾ 愛の習慣をお与え下さい。
13. 再びわれわれをその⁽¹⁷⁾ 奉仕の役につかせて下さい
⁽¹⁸⁾ あなたの仕事をあなたを恋する者にさせて下さい。
14. 神の道を行く者に⁽¹⁹⁾ 承認の階段を与えよ
イブラーヒームの信仰の力を与えよ。
15. 愛を⁽²⁰⁾ 「なし」の祈りで明らかにせよ
⁽²¹⁾ 「アッラーの外に」の秘密を明らかにせよ。

II

16. 他の人のために蠟燭のように燃えているわたしは
わが共同体に蠟燭のように涙することを⁽²²⁾ 教えている。
17. 神よ⁽²³⁾ 涙を与えよ 心が明るくなるような
心が不安となり落つかなくなり 安楽を燃してしまえるような。
18. わたしは⁽²⁴⁾ 庭にその涙を撒く、それで火は成長
チューリップの覆いも色あせて見える程の。
19. ⁽²⁵⁾ 心は昨夜に捕われ目は明日に向けられている
集まりの中ではわたしは孤独である。
20. 誰もがそれぞれの思いでわが友となった
だがわたしの心の秘密を探そうとはしない。
21. 神よ、この世にわたしの友はどこにいるか
わたしは⁽²⁶⁾ シナイの棗椰子、カリームはどこに。
22. わたしは残虐者、自分に⁽²⁷⁾ 残虐な行為をした
一番の残虐は自分の腹で⁽²⁸⁾ 炎を育てた。
23. その炎とは⁽²⁹⁾ 理性や意識の財を強奪するもの

⁽¹²⁾ 神の道にやって来る神に背く偽りの力を焼き払え。

⁽¹³⁾ 同盟と友愛。

⁽¹⁴⁾ 分派主義。クルアーン第42章13節に「分派を作ってはならない」とある。

⁽¹⁵⁾ イスラーム共同体を愛と友愛の環に通して下さい。

⁽¹⁶⁾ 愛と結合。

⁽¹⁷⁾ われわれにこの世で革命を起した真実を言う神佑を与えよ。

⁽¹⁸⁾ あなたの偉大さの叫びをこの世で高くした最初の感動をわれらムスリムに与えよ。

⁽¹⁹⁾ 神の言葉を受け入れる勇氣。預言者イブラーヒームは夢の中で神に自分の息子イスマーイールを犠牲にすることを命じられ、イブラーヒームはその命令を実行しようとしていると神の方より息子の代りに羊でよいとの言葉があった。クルアーン第37章102~105節参照。

⁽²⁰⁾ 多神教を否定して。

⁽²¹⁾ 一神教の秘密。反逆者や偽りの力を否定し、努力すればムスリムは失なった力を回復する。

⁽²²⁾ 失なった地位を取り戻すために。

⁽²³⁾ 『預言者の言行録』によれば泣くことは心が明るくなる。なお神は僕たちの弱さが好き。

⁽²⁴⁾ ムスリムの心に熱情が生じるように。

⁽²⁵⁾ わたしはイスラームの偉大な過去を思い浮かべ、再びそのようになることを願っている。

⁽²⁶⁾ シナイ山でムハンマドが神の顕現を見た所。

⁽²⁷⁾ イスラーム共同体の悲しみの中にある苦痛。

⁽²⁸⁾ 愛の炎。

⁽²⁹⁾ イクバルの思想は哲学より愛を重視。

- その火は理性や意識の裾野に放たれるもの。
24. ⁽³⁰⁾ その炎は理性に狂気を教えた
知識を存在の財という理由で燃やした。
25. 太陽はその ⁽³¹⁾ 熱によって空の高さである
雷鳴は賞讃をしながらその周囲を巡っている。
26. われわれは露のように ⁽³²⁾ 涙の目となった
隠された火の管理人となった時。
27. わたしは蠟燭に明白に燃えることを教えた
だが自分では世の目から ⁽³³⁾ 隠れて燃えた。
28. ⁽³⁴⁾ とうとうわが血管から炎が吹き出した
わが心痛の血管から火が吹き出した。
29. わが夜鳴鶯は火花から餌をついばんだ
⁽³⁵⁾ 歌は火のようなものとなった。
30. わが時代の共同体の人々の胸には ⁽³⁶⁾ 心がない
⁽³⁷⁾ マジュヌーンも駱駝の背の駕籠が空いているのに震えている。
31. 蠟燭にとりひとりで燃えるのは容易でない
残念、わが蛾の一匹も ⁽³⁸⁾ わが炎の相手をしない。
32. いつまで同情者を待たばいいのか
いつまで ⁽³⁹⁾ 腹心の友を待たばいいのか。
33. 神よあなたの顔で月や星々は輝やいている
⁽⁴⁰⁾ わたしの命からあなたの火を取り上げて下さい。
34. この委託をわが胸から取り戻せ
宝の刺を ⁽⁴¹⁾ わが鏡から引き抜け。
35. あるいはわたしに ⁽⁴²⁾ 祖先のような友を与えよ
世界を燃やす愛を ⁽⁴³⁾ 鏡に与えよ。
36. ⁽⁴⁴⁾ 波は海で他の波と一緒に進む
一緒になって足掻くことが波の本性である。
37. 大空では星は星の仲間と一緒にいる
⁽⁴⁵⁾ 照る月は頭を夜の膝の上に置いている。
38. 昼間は冬至の夜と一緒にになる
⁽⁴⁶⁾ 今日は自らを明日の上に置く。
39. 小川が存在は小川の中に消えて行く
風の存在は風の中に消えて行く。
40. 廃虚の隅に踊りがある
一人の気狂いがもう一人と踊っている。

⁽³⁰⁾ 愛の炎は哲学や知識より重要。

⁽³¹⁾ 太陽は熱により威厳がある。イクバルは愛の炎を熱として考えている。

⁽³²⁾ 泣くことは人間の中に火を付けること。

⁽³³⁾ 燃えている蠟燭は人の目に見えてしまう。

⁽³⁴⁾ わが泣くことで。

⁽³⁵⁾ イクバルの詩は眠っているイスラム共同体に新しい魂を吹き掛けた。

⁽³⁶⁾ イスラム共同体に過去の感動が見えない。

⁽³⁷⁾ アラブの美女ライラーに恋した男。ここではイクバルの意で共同体に情熱がない。

⁽³⁸⁾ イスラム共同体の人はわが努力に無関心。

⁽³⁹⁾ 共同体の中で独りで燃える必要はなぜか。

⁽⁴⁰⁾ イクバルのメッセージに誰も関心を払わない。独りで燃えているだけ。何の益か。

⁽⁴¹⁾ わが心から。

⁽⁴²⁾ イクバルの感情とメッセージの理解者。

⁽⁴³⁾ 友。そのような熱情の持主となるように。

⁽⁴⁴⁾ 以下対句 36 より 40 でそれぞれの性格の説明。

⁽⁴⁵⁾ 親友と交友のしるし。

⁽⁴⁶⁾ 相互関係。

41. 神よ、あなたはご自分の存在で⁽⁴⁷⁾無比であるとはいえ
あなたは⁽⁴⁸⁾ご自分のためこの世界を完全にして飾った。
42. わたしは砂漠のチューリップのようである
わたしは⁽⁴⁹⁾宴でも孤独である。
43. わたしはあなたの厚情により友や仲間がほしい
わが性格の秘密を知っている人がほしい。
44. ⁽⁵⁰⁾夢中になり、だが知恵があり
⁽⁵¹⁾さまざまな世の人々の考えに惑わされないような人。
45. わたしは自分の狂気を神に任そう
その心の中の鏡で⁽⁵²⁾わが顔を見よう。
46. ⁽⁵³⁾わたしは自分の泥の一握りでその体を作ろう
わたしはその偶像になろう 彫り師にもなろう。

なお本訳は Iqbāl, Asrār-o Romuz, Shaykh Ghulām 'Ali and Sons Publishers, Lāhōre, 1984 を底本とし、その中の Asrār-e Khodī の部分である。

参考文献

- (1) Dr. Khwājah Hamīd Yazdānī, Sharah Asrar-o Ramood, Sang-e-Meel Publications, Lahore, 2004.
- (2) By A.R. TARIQ, SECRETS OF EGO, ISLAMIC BOOK SERVICE, LAHORE, 1977.
- (3) By REYNOLD A. NICHOLSON, THE SECRETS OF THE SELF, SH. MUHAMMAD ASHRAF, LAHORE, 1969.

⁽⁴⁷⁾ 神、唯一のもの。

⁽⁴⁸⁾ 自分の孤独を遠ざけるため。

⁽⁴⁹⁾ わたしのメッセージを理解し、人生を送ろうとする友達がいない。

⁽⁵⁰⁾ 愛の情熱に夢中となる人。

⁽⁵¹⁾ アッラー以外の考えには惑わされなくて、この世での関係がきれいな人。

⁽⁵²⁾ イクバルは自分の落つかない様子を神の鏡の中で見ることを望んでいる。

⁽⁵³⁾ イクバルは自分の思想や感情を知る友を自分で作り、それに自分の愛や情熱を代弁してもらおうと考える。